

息子考

島田大助

一 はじめに

近世文学には多くの笑いの対象となる人々が描かれる。武士・町人・僧・田舎者など、その時代に生きた人々が、そのあり方をもつて笑いの対象として描かれるのである。ただ、こうした人々も近世期を通じて常に笑いの対象として描かれているのではない。時の世相、時代を包む空気を反映し、ある時は笑いの中心となり、ある時には笑いの対象から外れるのである。本論考では、これらの中から「息子」を取り上げ考察を試みる。

二 川柳点に於ける息子

宝暦七年に立机した柄井川柳は寛政二年に没するまでの三十三年間に、江戸の前句附点者として三百万句に及ぶ寄句に点を附すことになる。江戸の市井に生きる多くの人々の支持を受け、膨大な数の寄句を集めた川柳点の句は、宝暦・明和・安永・天明・

寛政という時代相の一端を反映したものであり、その時代に生きた江戸の人々の笑いの嗜好を読み解く上で格好の材料といえよう。ここでは先ず、川柳点による勝句から「息子」を扱う句についてみていくこととする。

川柳が点者として立机した宝暦七年十月五日開きの万句合の勝句刷に次のような句がある。

惣領は平家のやうなそたちちよう

(和らかなことく 宝七・十・五)⁽¹⁾

前句の「やわらかなことく」に対し、おつとりとした総領息子の頼りなさを侍としての猛々しさを失った平家の公達の姿に重ね合わせた付句である。乳母日傘で育てられ独り立ちできない息子の姿が連想される。

翌宝暦八年の勝句刷には次のような句がある。

総領か曲ケリや妹かおこす藏

分別ハやはりおやじにしよわせ置キ
(うつくしい事く) 宝八・梅

(ざかり成りけりく) 宝八・桜・二

一句目は惣領息子によつて傾いた家運を妹の働きにより立て直す、妹の働きと出来の悪い惣領の対照が面白い句である。二句目は息子を表す表現はないものの、若い盛りの無分別で遊びまわる息子の姿が、親父との対照によつて描かれている句である。二つの勝句とも家を顧みず、遊び回る息子の姿を読みとることができよう。

お袋をおどす道具ハ遠ひ國

(目立社すれく) 宝十・櫻・老

宝暦十年の勝句であるこの句には、息子と母親との関係が読みとれる。出来の悪い息子の言葉になすすべのない母親の様子が「目立社すれく」の前句と相まって効果的に描かれている句である。

宝暦十三年の勝句にも息子と母親との関係を表す句がある。

母親はもつたい無イがたまし能イ

(氣を付にけりく) 宝十三・梅・二

宝暦十三年の勝句には次のような句もある。

若旦那いつでも帯を二タねしり

(たしか也けりく) 宝十三・櫻・老

かんきんもむす子がすれハにくく見へ

(それくな事く) 宝十三・智・二

おやたちに娘メをしよわせるどらむすこ

(こしらへにけりく) 宝十三・信・老

馬鹿むすこどうメの有ル娘をしよ

(さたの無イことく) 宝十三・鶴・二

どら息子、馬鹿息子、出で立ちを気にする息子など、息子を扱う句の多くが愚か者・不孝者を描くことが知られる。ただ、宝暦十二年には文字通り万句の寄句を集める万句合興行を三度(十月十五日開キ・十月二十五日開キ・十一月五日開キ)行つていくことから考えると、宝暦期に於ける「息子」に対する関心はそれほど高いものとは言えないと考えるのが妥当であろう。

では明和期になると如何であろう。次に明和期の勝句刷から「息子」の用例を確認していく。

宝暦十四年が改元され明和元年になった年には息子を扱う次のような勝句がある。

是むす子壱分んばらす氣ハ無イか

(つらい事かなく) 明元・松・三

若旦那四ツ迄あなの中に居ル

(たつね社すれく) 明元・龜・二

二句とも遊里関係の句である。ただ、勝句の数としては僅かなものである。ところが、明和二年になるとこうした状況は一変し、息子を描く多くの寄句が勝句として採られるようになる。

どらむすこ一寸く〜と藏へしまわれる

(とこもかしこもく〜)

明二・宮・三

きむす子ハうしろへたんとしわをよせ

(廣イ事かなく〜)

明二・宮・四

どらむすこ二度目の月は座敷牢

(恋しかりけりく〜)

明二・梅・壹

わか旦那一ト箱明けてつんのぼり

(ふとひことかなく〜)

明二・梅・四

商賣のしれぬむすこハしやむか好キ

(さそひ社すれく〜)

明二・櫻・四

とらむす子籠の中から姫をとり

(かため社すれく〜)

明二・櫻・五

すてに家くつかへさんとする息子

(とまり社すれく〜)

明二・松・三

座敷牢となりの息子しらぬふり

(そのはつのことく〜)

明二・松・四

きむす子ハ小便所にてきうそくし

(とまり社すれく〜)

明二・松・四

ふた親の人とおもわぬたいこもち

(ふしぎ也けりく〜)

明二・仁・四

下夕腹毛たらけている二才客

(つゝみ社すれく〜)

明二・仁・五

いつかどのどら口チ〜へ人を出し

(めいわくなことく〜)

明二・義・壹

こんれいのあしたむす子ハ見世でてれ

(いろく〜かあるく〜)

明二・義・二

その跡トを大屋のむす子引ツかぶり

(めいわくなことく〜)

明二・義・三

一ツ家中ひやく〜おもふ朝かへり

(ならひ社すれく〜)

明二・禮・三

母おやの本シをなげ込座敷牢

(おしひことかなく〜)

明二・禮・三

「きむす子ハ小便所にてきうそくし」は遊びなれない息子が小便所でこつそり休息している姿を描き、家中の者が心配して朝帰りを待っている「一ツ家中ひやく〜おもふ朝かへり」は、遊びの世界に入っていく息子の姿が家族の不安な様子を通して表現されている。こうした初々しい息子も次第に「わか旦那一ト箱明けてつんのぼり」のような千両箱一箱を遊び尽くす息子となり、商売に全く身が入らない息子は「商賣のしれぬむすこハしやむか好キ」の如き三味線ばかり弾いているどら息子へと変貌するのである。行き着く先は当然放蕩の末の座敷牢であり、「どらむすこ一寸く〜と藏へしまわれる」状況になる。遊び仲間の息子は、座敷牢に押し込まれたのを知りながらそ知らぬ振りを

される「座敷牢となりの息子しらぬふり」のような状況になり、果ては「母おやの本んをなげ込座敷牢」の如く母親に座敷牢にそつと本を届けてもらうことになるのである。

「遊び」以外をモチーフとする句もある。「こんれいのあしたむす子ハ見世でてれ」などが該当する。婚礼の翌日、店の者に冷やかされる初な息子の姿が読みとれる。

以上のように、明和二年になると息子をモチーフとする句の明らかな増加が見て取れるのである。こうした状況が単に寄句数の増加によるものでないことは、明和元年と明和二年の寄句数の比較からも明らかである。

では翌明和三年は如何であろう。明和三年の勝句刷には次のような句が勝句として選ばれている。

下女ふぜいなど、ちんじる若旦那

(かたひことかなく)

明三・満・壹

母おやのいけんおかむかい、おさめ

(あまり社すれく)

明三・宮・壹

若旦那つまらぬものをしよいこまれ

(あまり社すれく)

明三・宮・二

弟の仕合に成座しきらう

(まよひ社すれく)

明三・櫻・二

御息も真木部やへでもかくれる氣

(よわひことかなく)

明三・松・四

ふみ使むす子をはすにまねぎ出シ

(かくれ社すれく)

明三・仁・壹

朝かへり母ハはだして二三げん

(かくれ社すれく)

明三・仁・二

惣りやうハぐうたらべひなことをい、

(高ひことかなく)

明三・仁・三

御のふけだなと、むすこハ昼寐をし

(よこに成りけりく)

明三・仁・六

若旦那夜ハおかんでひるしかり

(よこに成りけりく)

明三・仁・七

むす子殿もふくろかもをつれたかり

(せひも無事く)

明三・禮・壹

見や見たがなと、ハむす子よばない氣

(せひも無事く)

明三・禮・壹

齋日に遣り手のむす子尋て來

(よろこひにけりく)

明三・智・二

あのむすこそれからやけに成たのよ

(たびくな事く)

明三・智・三

これまで確認してきた句と同想のものが多い。その中で「下女ふぜいなど、ちんじる若旦那」「若旦那夜ハおかんでひるしかり」などは息子と下女の微妙な関係を扱ったものであり注目される。下女の好色に関する句は川柳評の前句附には多く認められるのだが、こうした頻出するモチーフとの取り合わせは、息子像に新たな一面を加えることになる。また「ふみ使むす子をは

すにまねぎ出シ」は悪事の相談のために文を利用する息子を、「むす子殿もふくろかもをつれたかり」では、取り巻きを伴って街を歩きまわること願う息子が描かれている。

以上、明和三年も明和二年同様、息子を扱う句が勝句として多数採られている。当然と言えば当然であるが、投句者の視点も広がり、さまざまな息子像が提示されるようになってきている。投句者、その投句を勝句とする川柳ともに、この時期の息子を滑稽の対象とする関心の高さが窺えるのである。

こうした傾向は翌明和四年も続く。

若旦那呼リハ母のよいきけん

(うれしかりけり〜 明四・奉納亀戸)

のような息子の成長を喜ぶ母親の姿を描く微笑ましい句も見出しうが、多くは既出の句と同様の

むす子より母か木に成ル朝かへり

(はたらきにけり〜 明四・満・壱)

拜ムからよせとハ母のこわいけん

(よくばりにけり〜 明四・松・二)

のようなものである。遊里との関係では次のような句が目ざれる。

しんぞうを好ク内むす子人がよし

(なしミ社すれ〜 明四・仁・壱)

きしやうなと貰てむすこのりか來ル

(たまし社すれ〜 明四・義・五)

遊里と息子の関係がより具体的に述べられた句である。初な息子が徐々に遊里の世界に染まっていき、どら息子に変貌する過程が読みとれるのである。

頼りない息子が大人になり徐々に悪所の水に染まっていく。心配しながらも何もできず、狼狽える親たち、行く末は座敷牢への押し込み、更には勘当という道筋がこの時期頃までに川柳の中に形成されていくのである。

以上、川柳立机の年から息子について描く句を見てきた。

ここで一度、宝暦七年から安永二年迄に勝句として勝句刷に掲載された息子関係の勝句数を確認しておく。²⁾

	寄句数	勝句数	息子
宝暦七年	17331	511	1
宝暦八年	36732	1029	4
宝暦九年	58966	1643	0
宝暦十年	(45783)	(1348)	2
宝暦十一年	62666	1878	0
宝暦十二年	(79960)	2348	0
宝暦十三年	(83967)	2590	5
明和元年	116784	3371	2

明和二年	(98233)	2740	17
明和三年	111890	3088	14
明和四年	138708	4082	23
明和五年	112526	2885	19
明和六年	(83592)	2420	34
明和七年	85152	2259	48
明和八年	(87500)	2754	71
安永元年	97877	2664	81
安永二年	93688	2195	42

宝暦七年の立机以降明和元年までの間は、零もしくは数句のみであったが、明和二年には十七句になり、その後明和五年までは二十句前後で推移している。明和六年以降は急激にその句数を増やし、この時期に息子への関心が急激に高まり、川柳点に於ける主要なモチーフとして成長してきていることが知られるのである。

三 小咄本に於ける息子

川柳点に於いて急激に息子への関心が高まった明和末年から安永初年は、江戸小咄本が近世期を通じて最も刊行された時期にあたる。では、小咄では息子をどのように扱っているのだろうか。以下、確認しておく。

『鹿の子餅』(明和九年刊)⁽³⁾には次のような小咄がある。

○鞠
 まりにはまつた息子へ、親父、遠廻しの異見。いかな事聞
 入れねば、ある時よびつけ油をとりて、九損一徳、何のや
 くにたゝぬ芸、向後ふつたりやむべし。鞠があれば蹴たく
 なる。そのまり、うつちやつて仕廻へといふに、むすこ、し
 ほくと鞠を出し、手代をよひ、今までもてあそんだ此ま
 り、無下にすつるもあんまりじや。せめて庭の隅をほつて
 うめ、しるしに柳をうへてくりや

明和から安永にかけて江戸の市井で大流行した蹴鞠を題材とした小咄である。蹴鞠に熱中して家業を顧みない息子に対し、親父が意見をするという設定になっている。こうした芸事に熱を上げる息子を扱う小咄としては他に「○小鼓」(『聞上手』二篇、安永二年刊)などがある。

○医案

これも一人息子。よほどの日数をぶら／＼わづらひ、くすりや針の験も見へねば、親父くらうがり、少し通り者を出し、心安い若いしゆを、ひそかにまねいて、市之丞が病氣、引つこんでばかりのよふぜうハ、けつく、めづらいでわるい。貴様たちハ不断も心やすいは、こんな時じや。ちとさそふて、遊び所へつれて行て、気を転じさせて下さいとの頼ミ。得手に帆とうけ合、息子にあそびすゝむれど、一糸

んすゝミなく、どこへも出るハイやとのあいさつ。そうでハ濟ぬ。そんなら船はと、いろくゝにいへば、何もかもいや。しかし、芳町なら遊んで見たい気もあるといへば、安い事と、おやぢに内々かたれば、どこでも大じござらぬなれど、ちよつといしやとのへきいてミての事にして下さいと、念を入れて直ぐにいしや殿へ行、扱市坊もおかげてよほど心よふ、しよく好ミができました。どふぞ、よし町へ遊びにまいりたいと申ますが、どうでござりませう。イヤ、それハちとゆるしにくい。野郎はうま過てもたれると、不承知のてい。へしからバ、内にきれいな二才がござります。これを用ひませうか。へいやく、地穴ハ毒氣がある。これもなるまい。へそれでハ、せつかくの好ミが無になります。とふぞ御了簡を被成て下されませ。へハテ、こまつた物と、机のうへから、こまかに書た大冊の書物取出しひらき、眉に皺よせ、くり返しミ、ハ、ア、あるはく。へ何でござります。へ寒ざらしのやつこのけつがよい

(『鹿の子餅』明和九年刊)

親父が息子に遊びをすすめる小咄である。「ふら〜わづらひ」を煩った息子に気張らしのために、遊ぶことをすすめる親父。医者者の男色に關するこじつけの論が落ちになつてゐる小咄であるが、息子の気晴らしには「遊び所」と考ふる父親の発想が面白く、また、その父親が「通り者」の氣を起こすということについては、

洒落本に通じるものを感じ興味深い。

物前

親仁ハ渡世に油断なく、へ息子は色里へゆだんなく通ふ程に、親仁大に腹立、やがて二階へ追あげて、何方へも出さず。息子二階にて淋しきのまゝ、竹と紙とを買よせ、何やら細工をする躰なるが、盆前なれば二階より下りて、帳合にてませよと呼びつけ、扱何の細工をしたるぞと問へば、切子灯籠を夥く拵へたり。是を売せたれば餘程の理分あり。親仁大に悦びけるに、又々元の如く里通ひ、又二階へ追上ると、又々竹と紙とを買ひての細工。九月節前に成て、親仁思ふやう、今度ハ何の細工を仕たるかと、下女に二階を覗かせければ、又切子灯籠

(『飛談語』安永二年刊)

遊里通いのため、二階へ押し込められた息子、汚名返上のために盆に使う切子灯籠を作り、商売にしようとの発案に親父は大喜びし、一旦は許されるのであるが、またすぐに元のような放蕩生活に戻つてしまふ。息子を再び二階に閉じこめたところ、何かを作つてゐる様子に親父は期待するのであるが、作つたものは前と同じで時期はずれの切子灯籠であつたという小咄である。季節などお構いなしに、愚かな行動を繰り返す息子が笑いの対象となつてゐる。

○野等息子

いがみの権と来て居る息子、夜更てかへり、火もきへてまつくらやミ。親仁のあたまに蹴つまづき、ハア勿躰ないといふ声、母聞つけ、コレおやぢどの。こちらのむすこもころが直つたか、こなたのあたまにけつまづき、もつたいなといひました。息子聞て、ナアニ、おらアめしつぎかとおもつた

(『鹿の子餅』明和九年刊)

「もつたいない」との言葉から、『義経千本桜』の三段目に出てくる「いがみの権」のような不良息子の心根が直つたと勘違いし喜ぶ母親。それが間違いだとわかり笑いを誘う小咄である。

○文

息子、座敷牢へ入れおきしに、深川ちと、うハ書したるふミ、親父の手へわたり、ひらき見るに、吉原の焼だされと見へて、随分細字に紙のいらぬよふニ短くしたゝめ、物のいらぬ小指を切り、香箱で有そふな処を蛤貝に入れ送りしを、親父かんしんして、息子が前へもち行き、是、見おろう。世間でハ此よふに商売に身をいれるハ

(『葉牽頭』安永二年刊)

吉原通いの末に座敷牢に押し込められた息子に対して、小指

を切つてまで息子を呼ぼうとする遊女の行動が対照的に描かれている小咄である。息子への説教に遊女の行為を用いる親父の発想が笑いを誘う。座敷牢と息子を扱う小咄には「格子作り」(『聞上手』安永二年刊)などもある。

○朝帰り

息子遣ひ過し、勘当におよぶ処を、一家のそせうにて、其分にさしおく。有時、ぢびやうおこり、一夜ばかりハしれもせまいと、吉原へ行き、明る日戻りて、我内の首尾をのそぎ見れば、また一家どもあつまり居る。なむさん、又勘当の相談で有ふ。まつ、よふすを聞ふと、飯たきを呼出し、どふだ、内の首尾ハ。夕部旦那様が頓死被成ました。ヘヲ、それでおちついた

(『坐笑産』安永二年刊)

○平伏

息子、親父の前であぶらを取られて居るを、友達に見られ、おのしハ親父のまへで、畳へあたまをこすりつけて居たな。あのよふにあやまらずと、よさそふなものだ。へなにもしらずハ、だまつている。アアあたまを下るとな、異見がうへを通る

(『坐笑産』安永二年刊)

朝帰りの末に、親父が亡くなったと聞いて、勘当されることなくなくなったことを喜ぶ不孝息子。また一方では親父の意見を聞き流そうとする不孝息子。二つの小咄とも親を親とも思わない、不孝がモチーフとなっている小咄である。

安永二年に刊行された小咄本から息子の行いを笑いとする小咄を確認した。度を超した不孝、愚かな息子、母親と息子の微妙な関係、座敷牢に押し込められる息子、これらの小咄は概ね川柳点の勝句の中で扱われているテーマと同様のものと言えよう。これまでも、雑俳と小咄の密接な関係については、浜田義一郎氏・武藤禎夫氏・宮尾しげを氏などのご考察、高著などによって度々指摘されてきた。時として意外性が笑いを生むことがあるが、滑稽の対象となる人物には一定の笑いの形があり、その形のなかでさまざまな工夫が行われているのである。

四 『遊子方言』に於ける息子

この時期に刊行された戯作のうち滑稽を扱うものとして触れなくてはならないものに洒落本がある。

『遊子方言』は明和八年の『虚実馬鹿語』以降、洒落本・談義本中にその名前が認められるため明和七年以前の刊行とされている。周知の通り、「通り者」「息子」を中心に吉原好きの「平」、坊主客の他、船宿、遊里で働く者達の姿を描き、以後の洒落本の定型となった作品である。では『遊子方言』では息子をどの

ように描いているのであろうか。

『遊子方言』⁽⁴⁾は通り者番町と息子の出会いからはじまる。以下はその出会いの場面である。

通り者^よこれく色男くむすこいやこれはどふでござります此間^{せん}先生と御噂^{おん}申ました通り者^り先生はさへぬは多くおまへどこへ行さなるむすこ私は本所辺^{へん}へまいります通り者^り行ねばならぬ事か何しに行ッしやるむすこ伯父^{おぢ}きの。病氣^{びやうき}でおりまして。見舞^{みま}にさんじます通り者^り伯父^{おぢ}病氣ならば。ぐつとながしたいわいむすこなぜでござります通り者^りあんまり。つがもない。よい天気^{ひより}じやによつて。正燈^{しょうとう}寺とくらわせよふとおもふむすこなるほど私も正燈寺^{しょうとうじ}は参りたう御ざりますが。行て来て本所へ参られませうか通り者^り行れますく。そして。本所^{ほんじょ}ハ大流^{おほな}に。ながしてもよしむすこ何^{なに}にもせよ参りましよ通り者^りそんならぐつと。供^{とも}を帰^{かへ}しがよかるをあれが行たとても。紅葉^{もみぢ}がおもしろくも。なんともないわき。それよりは。内へ帰つてゐた方がらくだ。角平^{かくへい}なすとんだ通り者^りかこれ色男^{いろおとこ}はかまをく供^{とも}角平^{かくへい}それとも御用^{ごよう}がござらば。参りましよふかむすこいや行ずともゑい帰つて。いをうには。あなたに道^{みち}で御目^{ごめ}にかつて御同道^{ごどうぢ}申正燈寺^{しょうとうじ}へまいるによつて角平^{かくへい}をば帰^{かへ}しますかならず御あんじ被成^{ひなり}ますな供^{かへ}かへる

本所辺に住む伯父の病氣見舞いに出かける途中の息子に対し
通り者番長は、正燈寺へ紅葉見物に出かけようと誘う。その際、
供の者角平を家に帰すようにすすめられた息子はこれに同意し、
「あなたに道で御目にかゝつて御同道申正燈寺へまいるによつて
角平をバ帰しますかならず御あんじ被成ますな」と角平に告げ、
家に帰すのである。ここで紅葉を見物しに行く先として指定さ
れている正燈寺は吉原に近接していることから、当時吉原遊び
の方便として使われることが多かった場所である。川柳にも次
のようなものがある。

松洞寺むす子のまよふ法りのにわ

(きらひ社すれく 明七・智・三)

奈洞寺是かいやだと土手ていゝ

(ぜひにくくとく 明八・義・二)

ずつ来てずつと出て行奈洞寺

(きはめ社すれく 安元・満・壹)

奈洞寺こゝ迄來テといふところ

(きはめ社すれく 安元・満・壹)

奈洞寺むす子むみやうの酒に酔

(やめられぬ事く 安元・仁・三)

奈洞寺女房青イに氣がつかず

(しれぬことかなく 安二・梅・壹)

本来正燈寺は、

紅葉見といつちや出さぬとむす子いゝ

(うわ氣也けりく 明七・義・壹)

とあるように吉原行きが容易に連想できる場所であり、通常はその名を出すことがはばかられる寺である。読者はこのことを認知している以上、「かならず御あんじ被成ますな」という息子の家の者への言伝は読者にさまざまの意味を提供しているのではないだろうか。

かんじんの相談をわすれた正燈寺へは。しよせん行れな
いよ。貴様ほんに正燈寺へ行と。おもつていたかむすこあ
いゝ正燈寺へはいかさまもふおそふ御座りましよ通^り者^さ
あ其事^{こと}ツた。しよせん正燈寺とは。かりの名。よし原へ。行^ど
ふといふかねてたくんだ腹^{はら}だ。吉原へ行^いつても。よからう
がむすこあいはやく帰^{かえ}りさへすれば。よう御座ります

とあるように当初から息子も吉原へ行くことを前提として行動
しているようである。朝帰りが息子にとつて御法度であること
は、先に示した句の他にも

朝かへりよこへまねくハ母のじひ

(きのとくな事く)

明五・櫻・三

朝かへり入レ齒のぬける程しかり

(はしり社すれく)

明六・満・壹

のような句が多数あり、こうしたことが「はやく帰りさえすれば」という息子の発言につながっていると思われる。

むす子まだ内の出やうをしらぬなり

(いそぎ社すれく)

明六・義・二

という生息子にとつては、番長のような男の誘いはまさに渡りに船なのである。

ところで、この「二十才ばかりの人柄のよき柔和そうな息」は、はたして「初」²⁾なのであろうか。中村幸彦氏は「遊子方言評注」⁽⁵⁾の中で

作者は、この息子を全くおぼこと書いていると思われたなら、とんでもない間違いである。いや通り者はそう思っている風になつてあるが、余りに素直なところに、この青年もすでに経験者であることを、読者は、そつと知らねばならない。伯父の病氣見舞をやめて、紅葉見へ不良の友だちと行く。供のものを、「すとんだ通り者か」とおだてている

のを聞かぬふりで、真つ正直そうな口上を供にいわせる。何が「おぼこ」なものか。おとなしすぎるのが、くわせものである。現に作者も、鎌地屋本次郎を、「折ふしこゝらで見人じやが」といわせる。伯父きが何時も病氣もしまいし、何の用で当人が柳橋あたりをうろつくか。いわずと、これまた語るに落ちたせりふなのである。私は逢つた人も悪かつたと述べたが、それは客観的批評で、作中の当人には、追い風に帆だつたかもしれぬ。

と述べられ、それを否定しておられる。水野稔氏も『黄表紙・洒落本の世界』⁽⁶⁾の中で

正燈寺行きが吉原遊びの口実であることは当時の常識で、むすこも始めからそれぐらひは心得ていたような口ぶりである。

とされ、同様に遊びを知らないという息子を否定しておられるのである。

結局、部屋持ちの女郎にもてた息子は朝帰りをすることになり、明後日の逢瀬までも約束することになる。「あとへ残り、ほちくはなしをしてゐる」息子に対し、新造によつて二階から下ろされる通り者は「色男きたないぞへく」と叫び醜態を晒すことになるのである。朝帰りをすることになつた息子を待つ

ているのは、息子の帰りを心配して待つ母であり、小言の一つも言わないではすまない親父なのである。一方、通り者は、

連レにして面白ク無いいろおとこ

(実なことかなく 宝十・義・壹)

道連レによにくくわるい色男

(引く手あまたにくく 宝十三・義・三)

ということを再認識することになるのである。

以上、『遊子方言』の作中人物である息子に焦点を当てて見てきた。その描かれる姿は一件柔和でまじめそうな若者なのであるが、その裏側には計算されたたかさが見え隠れしているように思え、そこにこの洒落本に描かれる息子の味わいがあるのではなからうか。こうした息子像が『遊子方言』に於いてはじめて登場する特殊なものではなく、先に示した川柳・小咄などとの共通性から当時の滑稽文学の中で培われた息子像の範疇に収まるものと考えられるのである。『遊子方言』の影響がどうかは、なお不確かであるが、先の表で示した如く、『遊子方言』刊年と思われる時期を挟んで息子をテーマとする勝句が爆発的に増加していることは注目に値するであろう。息子への関心は『当世風俗通』(安永二年刊)の如き洒落本の他、『遊子方言』を模した数多の洒落本を生み出すことになるのである。

五 まとめ

川柳評万句合の勝句、安永初年の江戸小咄本、『遊子方言』をもとにして、これらの滑稽文芸に描かれる息子について見てきた。頼りない総領息子、家業に身を入れず芸事に熱中する息子、色事に熱中する息子、朝帰りを繰り返し母親を悩ませる息子、父親に叱られる放蕩息子、座敷牢に押し込められる息子など多岐に渡るのであるが、この時代に生きた作者及び読者の意識の中には意外によつて引き起こされるものでもあり、また共通の認識によつて引き起こされるものである。『金々先生栄花夢』(安永四年刊)の金兵衛、『江戸生艶氣樺焼』(天明五年刊)の艶二郎もこうした息子像の延長線上にあるのではないか。

今回は紙幅の関係上、通り者・浅黄裏など、この時期の滑稽を考える上で重要と思われる作中登場人物について取り上げることができなかった。これらについても別稿において論じるつもりである。

【注】

- (1) 以下の川柳の引用は『川柳評万句合勝句刷』1〜7（川柳雜俳研究會 平成五年五月二十日〜平成七年四月二十日刊）に拠った。
- (2) 句数を数えるときは原則として「息子」「惣領」など息子を表わす表現を含む句とした。安永二年までとしたのは、本論考が小咄本との対比を目的の一つとしているためである。なお、勝句刷によって寄句、勝句の数が確定できない年については表の中でカッコを付した。
- (3) 以下の咄の引用は『噺本大系』第九卷（東京堂出版 昭和六十二年六月三十日刊）に拠った。
- (4) 以下の『遊子方言』の引用は『洒落本大成』第四卷（中央公論社 昭和五十四年四月十日刊）に拠った。
- (5) 『遊子方言評注』（『中村幸彦著述集』第八卷 中央公論社 昭和五十七年七月十日刊）
- (6) 『黄表紙・洒落本の世界』（岩波書店 昭和五十一年十二月二十日刊）